

心身障がい者部会手話講習会報告

6月16日役場会議室で心身障がい者部会の手話講習会が行われました。参加者は中標津手話の会から12名、民生委員児童委員13名でした。内容は手話を覚えることが主ではなく、耳が不自由な方の気持ちを理解することを中心に進められました。覚えてたての手話を使って各自が自己紹介をしたあとに、実際に耳が不自由な方の困り感を聞きました。

Bさんは、「車が近づくことに気づかない事があるし、話している相手がマスクをしていると口話も解らない。健康診断なども、レントゲンや、バリウム検査など、通訳者が同行できない場所だと検査技師が話していることが解らず大変困る事が多い。」

F(例会を行っています。興味のある方は、79:1231(中標津町社会福祉協議会まで

このような日常的に困り感を抱いて生活している方の話を聞き、参加した委員の方は認識を改たにして会を終りました。



(山上 裕和)



民児協だより「ふれ愛66号」いかがでしたか?
3年前の委員改選で山上広報委員長と8人の委員で61号から66号までの発行となり民児協がどの様な活動をしているのか、また共に色々な活動をされている組織や団体の事など皆さんに広く知って貰いたいそんな思いで編集作業に取り組んできました。発行にあたり原稿の依頼取材にご協力頂いた皆さん有難う御座いました、限りある紙面の中で無理なお願いなどがあつたかと思ひます。新しく登場した4コマ漫画「ハローみんせい君も面白おかしく漫画の素晴らしさを感じました。余談ですが最近ドラマ化された「ひとりでしにたい」も漫画でした。自分一人で自由に人生を生きて、そんな人がお一人様と呼ばれるみたいで昭和生まれの自分には複雑な心境です。令和の便利な時代だから他人と必要以上関わらず一人で生きていけるのか? 老後はどうなるの? 一人で死にたい? そうなると民生委員の訪問が必要になってくるのかな? はてなマークが頭の中で渦巻いています。最近、現役世代の方々の安否確認サービスが出てくるみたいですね。人は一人で生きていけない、だから寄り添い支えあって生きていく、それが人と言う字だと聞かされてきました、今一度寄り添ってみませんか? 次の「ふれ愛67号」からは新しい広報委員会となりますご期待ください、三年間ありがとうございました。

(杉本和玄)

◎本誌へのご意見や問い合わせなど、身近な民生委員児童委員にお寄せ下さい。

民児協だより ふれ愛



この広報誌は赤い羽根共同募金の助成を受けて発行しています。

=第66号=
令和7年9月発行

中標津町民生委員児童委員協議会
(中標津町役場町民生活部福祉課内 ☎74-0884)

「赤い羽根」共同募金委員会役員の委嘱を受けて



中標津町民生委員児童委員協議会
総務企画副委員長 高玉 晴美

民生委員を受けて今年で18年になります。受けてすぐに共同募金委員会役員をすることになり、大口募金に協力していただく企業や商店を回ったり、興行募金の手伝いをしました。5年前にコロナウイルス感染症が流行し、大口募金は振り込み対応になり、募金は激減しました。共同募金の金額の6割は地域の福祉のために使われています。募金が少ないと福祉活動に支障が出てくると思われます。

これからも共同募金と社会福祉協議会に協力しながら少しでも地域の福祉に貢献出来たらと思います。

令和7年度中標津町民生委員児童委員協議会 道外研修報告

■研修の概要

5月25日から28日、3泊4日で宮城県・南三陸被災地復興視察と福島県の障がい者就労支援施設を研修先とした道外研修に行ってきた。松田吉正会長をはじめ24名と事務局1名が参加しました。

東日本大震災では、地域の高齢者等の安否確認や避難支援にあたった56名もの民生委員が亡くなりました。強い使命感が大きな犠牲につながりました。毎年、全国各地で災害が発生し、高齢者や障がい者等の災害要援護者の避難行動や避難生活における支援のあり方が課題となり民生委員の役割や災害時の活動のあり方が問われています。

普段の活動の中では民生委員同士の名前と顔が一致しないこともありましたが、このような長期研修を通して移動中のバスの中、研修や途中の見学先、食事等での会話を通して親交を深めるよい機会となりました。



■女川町復興の 取り組みと課題

女川町観光協会の阿部真紀子さんに震災時から悲しみを乗り越え、行政、町民が一体となって未来を見えた復興の取り組みを実体験を交えながらお話ししてもらいました。

女川町は漁業の街、山林が町域の84%を占め宅地は28%と僅かな海沿いの低地に居住区を形成しています。東日本大震災では14・8mの津波により全壊・大規模半壊流失で73%が被害にあいました。完全な「防災」には限界があることから災害時の被害を最小限に止める「減災」の考え方を基本に復興計画が立てられました。土地全体の高を上げ、防潮堤機能を持たせ、商業エリアは4m高上げし標高



(松本 毅)

5.4m以上、居住地は標高20m以上の高台に、学校も含めた公共施設を集約して利便性を高め約10m高上げし標高20m以上にしました。人口1万人以上いた住民も今現在は5800人ほどで6〜7割が70歳以上です。高台の集合住宅に住んでいます。高気密化等で隣の声が聞こえず孤独死が増えており、民生委員が見回りをし声かけをしているのが実情です。若い人が住むには家賃が高額すぎて入居できないなど、若い人と高齢者が共存できる環境づくり等、新たな課題があるとのことでした。

■南三陸町東日本 大震災伝承館を 視察して

26日(月)午後、東日本大震災被災地復興視察として南三陸町東日本大震災伝承館を視察しました。最初に伝承館顧問の高橋三清さんから説明を受けました。高橋さんは元南三陸町役場の職員で、当時、町は防災計画を立て、避難訓練を毎年実施していたにも関わらず、想定を大きく上回る高さの津波により多くの町民が命を落としてしまった事への心の痛みから、実効性のある津波対策を実施するために伝承館の取り組みをされているという事でした。

伝承館の目的は「想定を超える津波に対する備え」です。具体的には「防災ミニブック」を来館者に配布し、映画を視聴しながら、「知る」「話し合う」「確かめる」「もつ二度考える」というプロセスを繰り返す事です。伝承館視察後、伝承館周辺にある被災モノユメント、防災施設などを語り部ガイドの案内で視察しました。

「震災から14年が過ぎたのではない。次の震災に14年近づいている」と私は考えている」との高橋さんの言葉が印象に残りました。

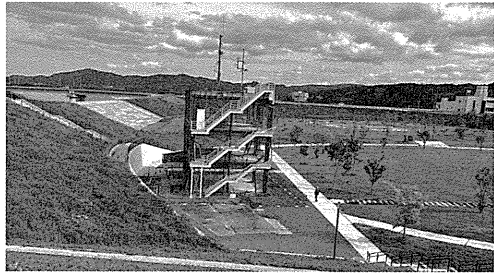
(石垣 弘毅)

■被災地を 再び訪れて

道外研修で宮城県・福島県を訪れ、東日本大震災の復興状況を視察してきました。12年前にも同じ時期に研修で訪れたことがあり、変化の大きさに驚かされました。

松島海岸は、当時は観光客もまばらでお店も閉まっているところが多かったのですが、今回は通りに人があふれ活気が戻っていました。初めて訪れた女川町では、職員の方の説明を通じて、まちの再建とその課題について深く学ぶことができました。

まちづくりには「防災」と「暮らしやすさ」の両立が必要であり、災害に強い構造が必ずしも人にやさしいとは限らないと感じました。以前の道内研修で訪れた夕張市のコンパクトシティ化の試み、とも重なり、地域再生の難しさを改めて実感しました。南三陸町では、10メートル以上の盛り土による土地造成が進み、かつての風景が変じていました。新たに



整備された「南三陸311メモリアル」では、震災を追体験しながら、防災について多くを学ぶことができました。私たちの住む道東も、将来大きな災害に見舞われる可能性があります。今回の視察で学んだ知見を、地域の備えとつながりづくりに活かしていきたいと強く思いました。

(小柳 ひろみ)

■障がい者就労支 援施設を訪問して

27日、福島県にある障がい者就労支援施設「共に生きる くらーばー(就労継続支援B型)」の皆さんの歓迎を受け、講話を聞いたり施設内の視察をしてきました。就労継続支援B型とは、一般就労の難しい障がい者の方(または医師の診断がある方)が支援を受けながらリハビリや訓練を兼ねた作業を行う福祉施設です。現在は利用者16名の方が施設で様々な作業をしています。

委託業務(チラシ折り込み、贈答用果物



令和7年度根室管内民生委員児童委員 専門研修の報告

6月9日別海町生涯学習センターみなくろで民生委員児童委員、主任児童委員のための専門研修が行われました。1市4町から67名の委員が参加しました。講義1は、道民児童連事務局長の馬川氏による「住民支え合いマップ」二つ目は、釧路児童相談所地域支援課長田口氏による「子どもに関する支援事例から学ぶ」でした。

住民支え合いマップについては、他の民児協でも取り組まれている試みです。富良野市民児協が精力的に実践し成果が報告されています。この支え合いマップは住民の方と一緒に見守りを進める新たなスタイルとして、地域のお世話焼きさんと協力してつなかりが見える「支え合いマップ」を作成し、災害に備える取り組みや日常抱えている課題解決に役立てることができま

Ⅲ 住民支え合いマップの作成方法

従来の方法による支え合いマップ作成場面(イメージ)

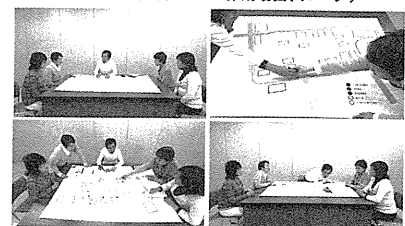


写真:道民児童連作成「地域支援調査(住民支え合いマップ)事業研修用DVDより引用

これまでのマップ作成方法
ご近所の住民4〜5人にお集まりいただき、互に自分の住んでいる内容などを聞き取り、地図に記入する。

聞き取り場面
を見てみましょう!